
一四人目

天月黎璽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一四人目

【Nコード】

N7016E

【作者名】

天月黎璽

【あらすじ】

「かごめかごめ」を十三人でやると、何時の間にか一人増えて、居ない筈の十四人目が居るんだって。

一回り

こんな噂がある。「かごめかごめ」を一三人で行うと、いつの間にか一人増えて一四人になっているというものである。それが真実であるかどうか確かめたくて、私は一二人の知人を募って「それ」をすることを計画した。

計画を立ててから一週間後の土曜日の夜に「それ」は行われた。皆「本当に一人増えるのかな」「何か、こう、とりつかれたりして」と騒ぎ立て、ちよつとした恐怖を楽しむ気であつた。そのうち一人が「おい。そろそろ始めないか」と言い、一人、輪の中に入る人を決める二人、三人一組の勝ち抜けのじゃんけんをした。結局、私が最後まで残つた。知人達が輪を作り、その中に入る。「かごめかごめ」をするなど小学生以来である。おそらくそれは皆同じであろう。

「じゃあ、Aはちゃんと目を隠して」

「分かつた」

「なあ、これって他に何か、こう、特別にすること無いの？」

「A、どうなんだ？」

「俺が知ってるのは一三人でするって事だけだよ。それ以外は特に聞いた事無いな……」

「何か、ちゃんと手順を踏まないといけないって事は？」

「それも」

「なんだよそれ」

「ねえ、どうする？このまま続ける？」

Eに明らかに不安の色が見える。皆も、私も多かれ少なかれ不安は抱いていた。暫く沈黙が続いたが、Dの「やろう」の一声が沈黙を破つた。私は再びしゃがみこみ、顔を組んだ腕に埋めて目隠しをする。知人達も輪を作り直し、隣同士手を繋ぐ。「皆、いいか？」私がそう訊ねると「いいよ」「ああ」「OKだ」と口々に答えた。

「それじゃあ、始めてくれ」

「…いくぞ」

Dが調子をとる。皆、自然と繋ぐ手が強く握られる。

「…かーごめかーごめ…」

それが、始まりだった。

二周り

かごめかごめ

籠の中の鳥は

いついつ出やる

夜明けの晩に

鶴と亀が滑った

後ろの正面だあれ？

「…かーごめかーごめ…」

辺りにかごめ唄が響きはじめ、かごめかごめが始まった。

「かーごのなーかのとーりーはー」

「いーついーつでーやーるー」

「よーあーけーのばーんーにー」

「つーるとかーめがすーべったー」

「うしろのしょーめん」

「だーあれ？」

唄が終わった。だが、どうすればいいのか、分からない。このまま誰かの名前を口にすべきなのか。だが、口にして、もし、実際に何かあったら。何かあってしまったら。それなら、何も言わずに、黙っていた方が良いのか？ いや。それも何かある気がしてならない。Aだけでない。皆、その事を思索しているようだった。そして誰もが、静かに、だが確かに、少しずつ、恐怖に蝕まれていた。誰もが、この身の保障の無い遊びをしてしまったことを、後悔していた。

暫く、沈黙は続いていた。だが、

「H」

重く、だが鋭く張り詰めた空気に、その一言は響いた。輪の中に居たAの、乾いた口から、精一杯の、掠れた声から発せられた名は、「H」だった。

言ってしまった。この時、Aは後悔と罪悪感を覚え、身動きができなかった。いや、正確には、身動きを取りたくなかった。後ろに居るのが誰なのか、振り向き、確かめることなど、とてもできなかった。「言ってしまった！」「答えてしまった！」「何かあるのかもしれないのに！」「皆に何かあるのも知れないのに！」「Hに何かあるのかもしれないのに！」「俺に何かあるのかもしれないのに！！」Aの声にならない、声にできない叫びであった。

Aだけでない。誰もが、言ってしまった、と、思っていたであろう。誰も何も言わない。そんな静かな時間が流れてゆく。いや。時間すら、全てが停止したかの様な空間。ただそれだけの世界が、そこにはあった。

誰かの名を口にすれば何かありそうで、かと言って、誰の名も口にしなければそれも何かありそうで。その様な状態だからこそ、皆、Aの行為が、そして言葉が、異様な程に気になったのだ。

しかし、暫く、皆、様子を伺っていたが、何事も無かった。だが。一つの恐怖の終わりと共に、また新たな恐怖が浮かび上がってくる。すなわち、Aの答に答えるか、否か。

心の奥底から、さらに、滲み出てくる恐怖。再び、恐怖に蝕まれてゆく。おそらく、誰もが精神的疲労を感じているであろう。

その時であった。

「は……」

それは微かな声であった。しかし、確かに皆に聞こえた。全員の意識が、声の方へと向けられる。

「はず……れ……」

Iであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7016e/>

一四人目

2010年10月9日18時13分発行